

綿森 淑子・他 著
実用コミュニケーション能力検査

CADL 検査

(A4 変形 130 頁 5,150 円 (税込) 1990 年 医歯薬出版 刊)

本多 知行

(川崎医科大学リハビリテーション科)

失語症患者の実生活でのコミュニケーション場面を考えたとき、従来の失語症検査では十分な情報とはなりえないと感じる人は少なくないと思われる。この問題を解決する目的で、著者たちは 1976 年アメリカの Holland 教授の考案した CADL 検査: Communicative Abilities in Daily Living—A test of functional communication for aphasic adults を取り入れ、日本人失語症患者に適用できるようにした。1986 年に標準化を完了し、その集大成がこのたび発刊となった実用コミュニケーション能力検査である。

この本の構成は I～V 章に分かれている。I 章では、実用コミュニケーション能力検査の考え方とその背景、および従来の失語症検査との相違が述べられており、この本の主旨が良く理解できる。II 章では、検査の実際がきめ細かく

書かれている。また、実生活の場面設定(病院、外出、電話、新聞、テレビなど)が次々とでてきて面白い。III 章では、CADL 検査の本質とも思われる関連要因とストラテジーの話がでてくる。両者とも聞きなれない言葉である。課題遂行に際しては、言語の側面や認知・行為の側面の要因がいくつか複雑に関連している。この要因を関連要因と呼び、著者らは本検査に関連する要因を 15 個あげている。またストラテジーとは、患者自身がコミュニケーション上の困難さを補う工夫(例えば、聞き返し、ジェスチャーなど)を指している。この両者を整理し評価していくことが、実用コミュニケーション能力を高めるうえで大切なことであると述べている。この章では課題遂行の関連要因が 5 つ以上あるものもあり、問題を分析する力を養われるところが面白い。

IV 章では、検査結果の解釈と言語治療について書かれている。治療法の原則として、日常性、伝達性、ストラテジーの活用、交流重視の 4 原則をあげているのは興味深い。さらにコミュニケーションレベルごとに、患者周囲の者の対処の仕方が記載され、わかりやすく参考になる。V 章の資料では、失語症以外の患者にもこの検査法が使用できる利点を述べている。

総じて失語症患者に対する言語治療分野に新風を送り込むすがすがしい内容ではあるが、強いて難をいえば、検査項目の中に病院で処方箋をもらい、薬局に提出する課題がある。日本では患者自身が直接処方箋を見るという機会は少ないのではないかと、ちょっと心配になった。また、検査課題にかなりの道具を必要とするのも簡便さに欠ける。しかし、これは著者らも考えており、資料に短縮版が載っているのはうれしい限りである。

失語症患者に対する日常コミュニケーションの対処の仕方を学ぶうえで、言語療法士はもとより医師、看護婦、理学療法士、作業療法士にも大変有用であり、是非一読していただきたい図書である。